

Kamigami
no
Koushin

神々の交信

宮崎すみ 句集

宮崎すみさんは我が「対岸」を代表する作家の一人である。その生来の明るさはご主人の逝去という事態を受けて大きな翳りを帯び、知性は加齢とともに深く重く作品の奥に沈んでいる。「海坂」以来十七年の沈黙を破つこの句集「神々の交信」を私は心から推したいと思う。

今瀬剛一

年
輪
か
単
なる
皺
か
亀
鳴
け
り

た
ん
ぽ
ぽ
の
絮
は
一
発
触
発
か

人間は生まもの梅雨に入りけり

どの本にも触れずにゆきし黒揚羽

栄
転も左遷もさくらさくらさくらかな

メ
ニエールてふ春風にあそびもの

三人の子が居り山の笑ひけり

墓建てて夫埋めてこの若葉かな

神々の交信獅子座流星群

参道は海より展げ木の芽晴

葉桜となりて水際のうすみどり

ががんぼが立ててゐるなり紙の音

夕立の前ぶれ鯉のよく動く

寝る刻が来て寝たやうで明易し

純
白
の
聖
母
像
秋
立
ち
に
け
り

ク
リ
ス
マ
ス
ピ
ア
ノ
の
脚
の
黒
光
り

雪雲の匂ふばかりに垂れて来し

砂濡らすほどの波くる夕ざくら

葬列のしんがり桜よく見ゆる

白魚の五臓六腑の硝子張り

紅梅や南斜面に若者ら

箸函に箸をさめて雛の夜

七曜に二度の仏滅食中り

耳たぶに酔のすぐ出て夕蚩

家よりの道の勾配夏つばめ

雨となるらし牡丹の咲きおもり

紫陽花の向うを人の通りけり

灼けきつて居り長瀬の塞の神

轟
きて
灌
た
ち
上
が
り
立
ち
あ
が
り

灌
見
た
る
の
ち
良
く
匂
ふ
杉
一
樹

ががんぼが障子にあたり一人なり

灌二つ落ち合せて水平らなり

隙間なき暑さ病院とは白し

ひたすらに道はありけり
鱗雲

据
る
石
こ
ろ
が
る
石
も
秋
の
風

垣
を
結
ふ
紐
き
し
き
し
と
返
り
花

青空を溜めて十一月の海

夜の爪きつて冷えゆく幾山河

思ひ余りて実柘榴の爆ぜにけり

秋風と思ふ遠山よく見えて

稲
び
か
り
だ
ま
つ
て
ゐ
れ
ば
唇
乾
き

継
ぎ
足
し
の
プ
ラ
ツ
ト
ホ
ー
ム
鳥
渡
る

霜
柱
茨
城
は
空
あ
を
き
国

走
り
根
の
あ
き
ら
か
に
灌
涸
る
る
な
り

致死量ぶん薬が溜まり冬ぬくし

息白くふだんのことば出し合へり

風鈴は軒端の
錘り冬星座

毛ばたきの毛が
又抜けて小春の日

紐
な
が
き
母
の
巾
着
冬
ざ
る
る

蝟
螂
は
念
仏
の
い
ろ
十
二
月



句集
神々の交信

発行 平成十九年八月十三日

著作者 宮崎すみ

発行者 井上伸一郎

発行所 株式会社 角川書店

〒102-8078 東京都千代田区富士見二丁目十三-三

電話 (〇三)三八一七一八五三六(編集)

編集制作 株式会社 角川学芸出版

印刷所 株式会社 シナノ

製本所 株式会社 シナノ

© Sumi Miyazaki 2007 Printed in Japan
ISBN978-4-04-621588-8 C0092